

昭和初期の豪華な折紙雛

—うずもれた光弘式折紙—

岡村昌夫

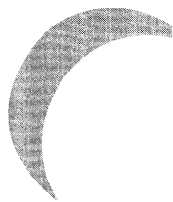
はじめに

お茶の水女子大学附属幼稚園に素晴らしい折紙雛があるということ、かねてから聞いていました。きれいに印刷された紙で折られていて、立派な桐箱入りの十五人揃いということですので、「光弘（こうこう）式」の「美術折紙」に違いないとすぐに見当はつきました。

先日、附属幼稚園に伺って、その折紙雛を見せていただく機会を得ましたが、果たして予想どおりの雛セットでした。繊細な衣装の色や柄と言ひ、漆入りと思われる黒の色つやと言ひ、思わずため息をもらしてしまふよう

な美しい雛たちが、赤い台紙に『美術折紙雛』と墨書きされた題箋を貼った桐箱から丁寧に取り出されたのでした。一体ずつを立てるための厚紙製の附属品は一度も使用された形跡がなく、この雛たちは箱の中で「たとう」に包まれたまま、毎年のひな祭りでも飾られることなく、七十年以上も大切に保存されてきたのでしょう。おかげさまで経年の痛みも褪色も見えず、雛たちは涼しげな表情をしていました。

これは昭和六年二月に十五円で売り出されています。現代では十万円ぐらいの感じでしょうか。よくわかりませんが、とにかく「たかが折紙」と言えるような値段では





▲図版1 「美術折紙雛」より「内裏」と「官女」
(お茶の水女子大学附属幼稚園蔵)

ありません。「満州事変」が引き起こされる直前の大不況時代に、驚くべき作品があったものです。

そこで、この、とても売れたとは思えない豪華な「美術折紙」と、これを作って売り出した「光弘」という人についてご紹介したいと思いますのです。

折紙雛・立ち雛・ひとがた

まず、「折紙雛」についてお話ししましょう。

「折紙雛」が、いわゆる「流し雛」の類で、人間の病氣や不幸を背負って流れ去ってくれる「人形（ひとがた）」から発生したものであるという説明はおそらく当たっていると思います（ただ、「ひとがた」は、古くは金属製か土製で、水に沈めたものでした。平安時代以来京都の賀茂川に流され続けているものは木製ですし、紙製が一般的になったのは意外に新しい習慣のようです）。室町時代以後に作られたと思われる「立ち雛」（紙雛）とも言います）は、頭（カシラ）を別に作ることなど、「折紙雛」とは違って「人形（にんぎょう）」の一種に分類されます。

さて、日本の「おりがみ」の代表的名作「折鶴」の基本的構造は、紙の表面を全部外に出して、縁と縁をびつたり合わせた形をしています。つまり、裏面を内部に封じ込めていて、これは現在でも残っている魔よけの「くり猿」「身替わり猿」の縫いぐるみの身体と同じ構造になっています。そして最後に息を吹き込んで仕上げるように伝承されていますので、おそらく折鶴は、厄よけの具として流されたり、飛ばされたりしたものだっただろうと私は考えています。

さて、折紙雛は、実はこのような「折鶴の基本形」から作られていたのです。現代では違う折紙雛もありますので、簡単に説明しておきましょう。

折紙雛の変遷

(1) 折鶴は十八世紀に入るころ急速に流行が広がりました。その百年ほど後には、同じ基本形による雛やその他の人物折紙が、折紙愛好家の間で驚くほどの技術の進歩を見せていました。仕上げにはいろいろ工夫が凝らされて違いも出ますが、基本はほとんど変わらずに明治・大

正・昭和初期まで作られ続けてきました。

これらは、折鶴の基本形に部分的に切り込みを入れて折り始め、顔を正方形の用紙の中央部分で作ります。白い一枚の紙で作りますので、衣装も白いままということになります。そこで、白い紙を折り上げてから後で墨や絵の具で彩色することが広まりました。絵の上手な人に描いてもらったり、人形師などに頼む場合もあったでしょうが、早くも十九世紀はじめごろには顔や衣装の部分を木版で印刷した用紙が売り出され流行しています。

最初はモノクロで、やがて豪華な色刷りも出てきました。これは、彩色の手間が省けるだけではありませんでした。折り線も刷られていますから折り方もわかりますし、色の部分が表面に出るように折ればよいのですから、細かい部分まで説明しなくても理解しやすいのです。

このような印刷物（便宜的に「色刷り展開図」と呼んでおきましょう）は、折紙を広めるのにずいぶん役立ちました。こういう展開図は、いろいろ形を変えながら現代まで商品化が続いています。

(2) 特に戦後になって、折紙にはさみを使うことを嫌う傾向が強くなりましたので、従来の折鶴の基本形に切り込みを入れる折紙雛は流行しなくなり、同時に「創作折紙」の興隆によってさまざまな折紙雛が作られるようになりました。顔だけを紙の裏が出るように折って白くしたり、複数の紙を使う「複合折り」にしたりしますが、切らないという制約からシンプルな形になることが多く、その素朴さが好まれてもいるようです。

光弘という人

お茶の水の附属幼稚園に保存されている光弘式『美術折紙雛』は右の分類の(1)に属したのですが、切り込みを多くして、「しゃく」や扇、矢大臣の弓・矢、官女の持ちもの、囃子の楽器などはすべて同じ紙から切り出しています。三人仕丁だけは六角形の用紙ですが、これも折鶴の基本形のバリエーションで、十九世紀初頭に出版された『折形手本忠臣蔵』に前例のある伝統的な技法でした。

ここで、作者「光弘」の略伝も合わせてご紹介しま

しょう。「光弘(こうこう)」という号は、昭和になってから折紙の仕事の場合に使用したものです。本名は「内山道郎(みちお)」、明治十一年生まれ、昭和四十二年に数え九十歳で亡くなりました。僧侶としての法名は「道夫(どうふ)」でしたが、あまり使われません。

生まれたのは現在の三重県津市の「増山(ますやま)家」で、父「多郎左衛門直道(なのおみち)」はもと藤堂藩の勘定方、母「なを」は御殿の姫君に仕えて、その勤めの中で伝統的な折紙を習い覚えたそうです。道郎はその両親の十番目の末子でしたが、幼少時に父を失い、山寺に入れられて辛い孤独な幼年期を過ごしました。十二歳のとき、耐えかねて逃げ出し、当時母が住んでいた四日市の、近くの寺に移ります。そのころ、産婆をし、また通いで御殿勤めも続けていた母からはじめて伝統的な折紙を習ったそうです。母はすでに五十歳を迎えようとしていました。

手先が器用で、発明好きだった道郎の才能を見込んで支援してくれる人もあって、二十三歳で上京、農商務省山林局に三年勤務したころ、東京本郷の内山徳兵衛に見

込まれて娘ふさの婿になります。内山家は、もと米問屋「越後屋」で、明治期に大地主になり、本郷一、二丁目はほとんど自分の土地と言われた資産家でした（ただし、道郎は内山家の事情があつてその後分家を立てることになります）。

道郎は「内山模型製図社」で、生来の発明好きの能力を発揮することになりました。仕事の中心は立体的な「地理模型」で、歴史用の掛図なども含めて学校相手の商売は順調だったようです。

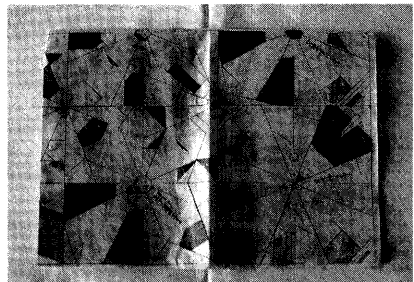
本業の傍ら、道郎は折紙の最初の仕事も始めます。明治四十一年に内山模型製図社から豪華箱入りの『ちえくらべ 折紙人形』（図版2）のシリーズを数種類発行します。これらは「色刷り展開図」と、それによって折り上げた作品に解説書を付けたもので、ひと箱の定価二十銭という、子どもの遊びものとしてはかなり高額でした。

内容は江戸時代の伝統をほとんどそのまま写したようなものを中心でしたが、制度ができたばかりの「実用新案特許」を取って、これ以後も、大量の作品群を片端から登録し続け、莫大な投資をしますが、折紙はまったく商

売にはならなかったようです。皇室に献上したり、上野の博覧会で売り出したりはしたものの、本業が忙しくなったこともあり、しばらく折紙の出版からは遠ざかります。この

間、長男は夭折、明治四十二年に次男義郎、四十五年三男秀郎をもうけますが、この三男が後の折紙名人で、著明な禅僧でもある内山興正氏です。

やがて大正十二年の関東大震災で印刷所が焼け、組み上がっていた大量の活字の残骸を



▲図版2 『ちえくらべ折紙人形』の箱（左）と色刷り展開図・練習用紙（右）

見た道郎は、活字なしで印刷する方法を工夫します。それが大きな発明につながりました。「単式印刷」という、印刷史に残る機械だそうで、単式印刷株式会社を設立、事業はさらに拡大して、一時は大層な羽振りだったと言いますが、じきに昭和の大不況に遭遇しました。

ところが、この時期に、道郎は突然のように折紙名人として世に知られるようになります。本業外の折紙に、莫大な費用を投入するようになったのです。すでに五十歳を越えていた道郎は、髪の毛が薄くなっていましたから「光弘」という折紙用の号（ペンネーム）を使うようになりました。

昭和六年二月に例の折紙雛を含んだ豪華な「美術折紙」のシリーズを華々しく出版します。十二月には「光弘式 折紙教本」が出版されました。翌年には、講談社の『婦人倶楽部』に折紙の連載が始まります。そして、そのころ、信頼していた共同経営者に裏切られて「倒産」したそうです。

※子息の内山秀郎（興正）氏の数種の文章によります。
しかし、実際には複数あった会社の一つが倒産したと

いうだけで、この後も昭和十年ごろまで、「内山光弘堂」（社長は内山秀郎）などから高価な折紙本を出し続けました。もちろん、奥さんは反対したそうですが、出版や特許登録に多額の費用を注ぎ込んでいたようです。

このころの数年間、光弘式折紙は大きく変化していません。それまでの光弘式は、用紙の裏を外に見せないことを特長として、作品の表面全体に描き込みや彩色をしていましたが、それを全廃して、さらに用紙の裏の白を利用するようにもなったのです。描き込みの廃止は、秀郎（興正）氏の意見を取り入れた結果でしたが、切り込みの廃止については絶対に出来ないという主張が生涯続きました。

そしついに、昭和十二年のはじめに破産してしまいました。原因はいろいろあったようですが、折紙関係に注ぎ込んだ資金の影響は大きかったと思われる。そして間もなく、光弘は六十歳前に埼玉県鳩山の観音院という寺に隠居してしまふのです。

しかし、これで光弘の折紙の仕事が終わってしまったわけではありませんでした。むしろこれ以後の三十年が

彼の折紙人生に大きな意味をもつことになるのです。

特に折紙人形の場合、描き込みをやめてしまったために、綺麗な衣装の表現が無理になってしまいました。そこで、数枚の「いろがみ」を重ねたまま折って、切り込みを入れながら、顔を白く、髪を黒く、衣装をさまざまな色に作って行く方法を工夫しました。昭和初期に「阿部たづな」という折紙作家が、白紙を下に重ねて折り、顔や袖口などを白くする方法を使っていたのですが、この「光弘式 重ね折り」はさらに複雑に工夫を凝らしたものでした。既製の千代紙を使わず、染色方法も新工夫した自家製の染め紙で、独特な趣のある折紙人形が各種作られました。これらは戦時中から終戦後にかけて鳩山の観音院時代に大成されたようです。昭和三十年に妻を亡くし、二年後、東京練馬の次男宅に移ります。

そのころから最晩年の十年間、「光弘」の名を不朽にした業績とされる「花紋(かもん)折り」に驚異的な情熱が注ぎ込まれました。コンパスや分度器を駆使して折り畳まれた幾何学的な花模様が万華鏡のように繰り広げられたのでした。昭和四十二年、光弘は九十歳の寿命尽きる

まで、病院のベッドの上でも、折って折って折り続けて遺された作品群は、現代でも高く評価されています。

光弘式美術折紙

「折紙名人内山光弘」の折紙は大きく次の三種に分けられます。

【第二】(1)人物、動物、その他種々の形を、伝統的な技法を継承しながら、切り込み・描き込みを多用して、色刷りで商品化したもの。(2)描き込みをやめて、白紙一枚折りにする。用紙の裏を利用することもあり、折りはやや単純化されてくる(昭和十年ごろまで)。

【第二】重ね折り。染め紙を重ね、切り込みを多用して、雛や六歌仙・七福神その他いろいろな物語の人物などを畳んで作ったもの。



▲図版 3 光弘式の折上げ標本

「第三」花紋折り。

附属幼稚園の『美術折紙鑑』は、右の「第二」の(1)の最終段階の豪華版で、同時に発売された『六歌仙』『七福神』その中でも特に贅沢なセットでした。

これらは「美術折紙同好会」を組織して発売されたのですが、驚かされるのは、その会の賛助員の顔ぶれです。

「柳田国男、岩谷小波、久留島武彦、香取秀真、倉橋惣三、片岡安、那須皓、和田英作、西沢笛畝、高村光雲、藤野静輝、藤五代策、池田敬八、福原鎌二郎、正木直彦、笹川臨風、石井柏亭、蘆谷蘆村、和田三造」という面々が自筆で署名捺印しているのですから、当時の光弘の力の大きさは想像以上のものだったでしょう。

まとめ

「満州事変」直後の不安な世情の中で、長引く不況と戦争の足音に包まれながら、何ら実用の役に立たない折紙のようなものに情熱を傾けた光弘―内山道郎氏について、少しでもご紹介する機会が得られたことをうれしく思います。

附属幼稚園の『美術折紙鑑』は、右の賛助員の中の倉橋惣三園長を通じて寄贈されたと推測されますが、このことも注目すべき事実ではないでしょうか。

明治初期にフレードリツヒ・フレーベルの恩物として幼児教育に取り入れられた折紙（摺紙）が、大正期からの自主主義的保育の潮流の中で、創造性を疎外するという理由などで否定されてきましたが、恩物系折紙とは異質の光弘式折紙を倉橋園長が賛助員として推薦した理論的根拠はどうだったのでしょうか。また、当時の小学校手工科の権威で、伝統的折紙にも造詣が深かった高等師範学校教授阿部七五三吉（しめきち）の名が賛助員の中に見えないことも気にかかります。

平凡社『大百科事典』（昭和六年初版）の「折紙細工」の項目の執筆者だった阿部教授は、（私の推定では）「阿部たづな」の筆名で、講談社『婦人倶楽部』に折紙の傑作を連載していましたが、その連載を引き継いだ光弘との接点はなかったのかどうか。興味は尽きません。

（折紙研究者）